

令和七年度 埼玉大学教養学部  
学校推薦型選抜

入学試験問題（小論文） 「九〇分」

【注意事項】

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 二 問題用紙は二枚あります。すべての設問に解答してください。
- 三 解答は解答用紙の指定された欄に記入してください。
- 四 解答用紙は五枚あります。すべての解答用紙に受験番号を記入してください。
- 五 試験終了後、問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章は、読書について書かれたものである。これを読んで後の設問に答えなさい。

小学生や中学生のとき、夏休みに本を読まされて苦労した経験をお持ちの方は少なうだろう。課題図書というものがあって、いついつまでに読んで感想文を提出しなさい、という宿題がいつもあった。読書を課題に押し付けられると、嫌いになってしまう人が跡を絶たない。逆に、「読むものぐらい自分で決めたい」と思う人が、のちにすぐれた読書家になったりすることもある。

読書に苦手意識を持つ人に共通する疑問は、「そもそも読書がなぜ大切なのかわからない」というものである。本を読まなくても仕事はできるし、本に書いてあることはインターネットを検索すれば出ていないかとも思うだろう。

私の回答は、「本は好奇心を満たし、自分の世界を広げてくれるもの」である。読むほどに自分の内面が豊かになり、生きる自信につながる本に出会うことは一生の宝となる。読書の行為そのものは形としては見えないのだが、精神が変化していくきっかけを与えてくれる。言い換えれば、人生を豊かにしてくれるもつとも安価で効率のよいものが読書なのである。

人が自ら物事を学んでいく過程では、その九割がすでに知っている事柄である。自分の興味のあるところをベースにして、そこからさらに深く学ぶのである。心理学の世界では「認知論」として語られる、学習メカニズムの話である。

そもそも本を読むプロセスとは、その九割がすでに知っていることをなぞる行為である。まず自分が持つ知識を再認識して安心する。著者も自分と同じことを言っていると知り、大いに勇気づけられるのである。これまで自分が持っていた考えには自信がなかったのだが、それが間違っていないかったことを著者に確かめてもらおう作業、と言ってもよい。

その上で、自分にとってはじめての情報が頭に入るのである。再確認によつて得られる安心感がないと、人は新しい知識を受け入れることが難しい。換言すれば、過去の自分を肯定されてはじめて、知的好奇心が湧きだすのである。頭のなかに新しいことを受け入れるには、それなりの準備が必要であることをまず知っていただきたい。

こうして一冊の本から得られる新知見は、自分の準備状況によつて決まる。その結果、新しいことはそんなに頭に入らないのである。たとえば、「そうだそうだ」「これでよかったのだ」と安心してからやると、「ああ、そういうこともあるのか」と気づく。ゆえに、獲得できる新知見の量は、すでに知っている量の一割程度でしかない。

言い換えれば、森羅万象のなかから何を学ぶのか、そのためにどんな行動をし、経験を積むのかは、自分の持っている知識の量が支配している。したがって、知識の種がないところに、新しい学びはないのである。

上記の事実は本の選択にも大きく影響してくる。自分が選ぶ本をよく考えなければならぬのである。多くの人は本について誤解をしており、新しい情報が満載されていない本には買う価値がないように思う。ところが、知らないことばかりが書かれた本は、なかなか読み進めることができない。

たとえば、学校で指定される教科書は、普通は知らないことばかりが書いてある。これでは読んでも頭が疲れてしまう。教科書は先生の指導の下に読み進めるには便利だが、一

人で読むようにはできていない。あまりにも無駄を省いた記述になっているため、独学には向いていないのだ。最初は知っている知識をなぞれるようなレベルで、初学者を意識して書かれた本を選ばなければならないのである。

このことを別の側面から述べてみよう。近年コンピュータが非常に発達し、社会を大きく変えつつある。その一例としてAI（人工知能）が、人間が行う多くの仕事をこなせるようになってきた。こうなると、われわれはAIにできないことを見つけ、人間らしい行動をしたいと思うだろう。

本を読む目的の一つに、こうしたときに役立つ知識や考え方を得ることがある。言わば、読書によつて、AIに振り回されない生き方を身につけるのである。AIができることはAIにさつさと渡す。AIに何ができ、何ができないかを峻別する能力を養うのも読書なのである。そもそもAIを動かすのは人間の頭脳であり、その機能を支えるのが読書である。

たとえば、AIに不可能な職業に宗教家というのがあるが、人と直接会って回心をもたらすことは人にしかできない。聖書や『歎異抄』<sup>たんいしやう</sup>を読むことで人は感動し、人生を変えてきた。ここで宗教書や哲学書が果たしてきた役割は、テクノロジーがいかに発達しても変わらない。

すなわち、パターン化した情報の操作はAIが得意とするところだが、人生はパターン化できない偶然に満ちている。<sup>⑧</sup>「想定外」に溢れた地球上で、同じように偶然に満ちた行為を行う生命の動きは、AIには扱えないのである。「そのとき、そのように」臨機応変に対応する力を養うもつとも簡便な方法は、読書をおいて他にないと私は思うのである。

（鎌田浩毅『理科系の読書術：インプットからアウトプットまでの二八のヒント』  
中公新書、二〇一八年より）

問一 傍線部①の「知識の種がないところに、新しい学びはない」について、著者はなぜそのように主張しているのかを、一〇〇字以内でまとめなさい。

問二 傍線部②の「多くの人は本について誤解をしており」について、「多くの人」は本に対してどのような考えを持ち、かつそれはなぜ「誤解」といえるのかを、八〇字以内で述べなさい。

問三 傍線部③に「偶然に満ちた行為を行う生命の動きは、AIには扱えないのである」とあるが、この文章は二〇一八年に書かれたもので、その後もAIは長足の進歩を遂げている。あなたのこれからの人生に対し、AIはどのようにかわっていくだろうか。いくつか例をあげながら一〇〇〇字以内で論じなさい。





解答用紙（その三）

問三

その四に続く

400

200

受験番号





下書き用紙